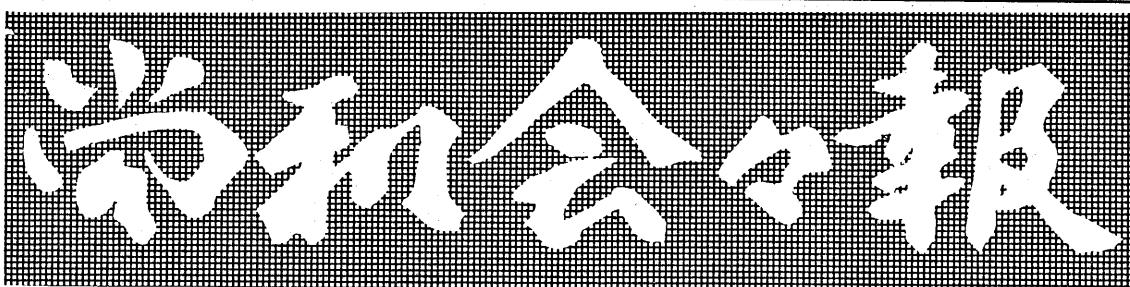


発行所 尚和会
豊中高女・校塙高校同窓会
発行責任者 永岡一彦
編集責任者 木村益子



学徒動員戦没者慰靈祭

三十年前の六月、学徒動員されていた時、B29の空襲で死亡した大阪府立豊中高等女学校の生徒七人の慰靈祭が、さる六月七日(土)午後二時から、豊中市岡町・瑞輪寺で行われました。

式には御病氣で欠席され

た仲田様の他は六人のご遺族をはじめ、尚和会役員、府教委、豊中市長、動員先の工場関係者、当時の姉妹、校府立池田高校同窓会役員、その他来賓諸兄、母校からは山本弘学校長始め旧師八名、現在の先生九名、それに生徒会代表、友人は一期から八期まで、遠く広島県、愛知県からの方も参列されました。約百六十余名。

式は瑞輪寺の阪田住職の読経に始まり、尚和会々長(後記)、山本学校長、友人代表の追悼文朗読と進み、當時を思い出してあちこちよりすり泣きの声がもれました。焼香の列は長く続きました。最後にご遺族代表の挨拶がありました。

追悼の辞

咲き匂う花も散り、母校を象徴する深緑が、一しお無情を感じる今日この頃でございます。女子学徒動員として、若き生命をもぎ去られました七人の靈に、その刻限の三十年を期して、慎しんで哀悼の意を表し、永久に御靈安かれとお祈り申しあげます。生あるものかならず終末を迎えて、彌陀の御もとに導かれますものとは申しますものの、戦の犠牲で他律的に召されましたことをおもいます時、いきどおり悲しみが交錯し、なぐさめの詞もみいだせません。

かかる追悼の詞を送りつつも、生前のおかっぱの黒髪と緑の蝶びのリボンが、セーラーカラーと共に脳裡に浮かんでなお、生き続けて居られる様な錯覚すら感じます。御仏様、私共では計り知れない程いたましくも悲しく、残されたものにとりましては、昏迷の中をさまよい続ける様な気がいたします。かかる不合理にこそ彌陀の救いだと信仰するのでござります。苦しみから再起されました御家族様、そして会員姉妹、共々力を合せて今は仏となられましたあなた方を記録の文に残し、かかることが二度くり返されない様、努力する所存でございます。最後に御冥福を祈つて御別れの合掌とさせていただきます。

尚和会々長

木村益子

昭和15年10月1日

学徒動員



ほむら野に立つ

大阪府立豊中高女学徒動員記録の会

昭和五十年一月、高女四期～八期までの同窓諸姉に、学徒動員の記録を作るための原稿依頼をしました。戦後三十年もたつてのお願いに、今ごろ何？と驚かれたことと存じます。その趣意書にも書いたことですが、母校に記録がなかった。ということがその出発点です。

大きく言えば、日本の教育百年の未曾有の苦悩のただ中にいた私達でした。友を七人も失つてまで國のためにと勵んだけでした。日々でしたが、その痕跡はどこにもとどめないなかつたのです。おそれながら、國家が学徒動員の犠牲者にも援護の手をのべようという時、そこには証明する何の根拠もないのです。三十年前の証明をだれがしようとするのでしょう。亡き友のことを見たときの現実、——その日を私達は残そうとしたのです。

本当のところ、原稿はとても集まらないだろうと思つていました。ところが集まつたのです。東京から、広島から、四国から、転校していった人達からも。それも、貴重な遺稿、当時の日記の数々、そして今りかえる三十年前を、五十人にあまる友が送つて下さつたのです。みんなの胸の中に消し

がたく残つていた火、それがこの書の発刊となりました。唯一校の記録にすぎぬとはいえ、そこには歴史の証拠があります。証人達です。ただ、三十年の時が、思いちがいや記憶するの憾みを残したことでも事実ですが、又、三十年のふるいにかけられた結晶の一つ一つが残つたとも申せます。編集しながら、当時の少女達の生きざまに、何度涙をこぼし、残る日々を如何に生くべきかを、考えたことでございましょう。

お読み願いたいと存じます。願わくば、若い後輩の人達にぜひとも、先輩は、母は、姉は、當時なぜ疑うことなく戦の炎にまぎれ、恐怖の極限で何を見、何をしたかを読んで頂きたい。生きている幸と平和がどんなに貴重なものかを、身体の中に沈ませてほしいと祈る私達なのです。

最後になりましたが、尚和会役員の皆様に深くお礼を申し上げます。趣意書を出しましたときから慰靈祭まで、みな様の暖いご援助のおかげで進みました。同窓会をこんなにありがとうございました。御わびと、深い感謝の念を申し上げます。

連絡所 〒532 大阪市淀川区西中島六一八一二
廣 実 輝 子 方



三十年前六月、七人の女生徒がなくなりました。強大な権力のもとに、あらゆる行動が束縛され、思考の自由すら抑圧された時代でした。

若くあまりにも若い生命をかきけられた方々——

矢延代様（高女5期）
沢田房子様（高女7期）
藤原敏子様（高女7期）
大北裕子様（高女8期）
北岡俊子様（高女8期）
仲田睦子様（高女8期）
星野良枝様（高女8期）

三十年前六月、七人の女生徒がなくなりました。強大な権力のもとに、あらゆる行動が束縛され、思考の自由すら抑圧された時代でした。

若くあまりにも若い生命をかきけられた方々——

三十年前六月、七人の女生徒がなくなりました。強大な権力のもとに、あらゆる行動が束縛され、思考の自由すら抑圧された時代でした。

若くあまりにも若い生命をかきけられた方々——

（編集局）

ご冥福をお祈り申し上げます。
ここに高女4～8期の方々による「ほむら野に立つ」

力で掲載できました。なお、紙数に限りがありますので、400ページ近くある右書の一部、しかも、文章は、編集局の責任で、部分的に省略しています。

ご承知ください。

忘れないのです

八期 野村弥栄子（旧姓 小西）

思い出したくないのです。
三十年も前のこと
三十一年も前のことですもの
わたしは十四歳の少女でした。

「ちくしょう!!」
われたちの工場がやられたア!!

三十年も前のこと
三十一年も前のことですもの
わたしは十四歳の少女でした。

「ちくしょう!!」
われたちの工場がやられたア!!

三十年も前のこと
三十一年も前のことですもの
わたしを抱きかかえながら叫んだ、あの、

悲しいときはどの声が……。
今の今まで働いていた工場が
まつかな火柱をあげて燃えているのです。

もう思い出したくないのです。
工場のすぐそばの麦畑の中でした。
土と、麦と、血との混じった足のきず口、

ボロボロに破れていました。
親切な工員さんたちが

胸の名札をみて
「うちの子や!!」と
みんなで抱きかかえてくれました。
まつびるまだというのに

あたりはまつ暗でした。
それはそれは恐ろしい 暗い空でした。
くろい空から 火の玉が

いくつもいくつも
落ちてきました。
「ねるなよ!!」ねたらおしまいや!!

耳もとで叫ぶ声が
聞こえたり きえたり
また聞こえたり…

車に揺られて
病院へはこばれて行きました。

忘れられないこことからだのきずが
忘れようとしても
忘れられないこことからだのきずが
うざります。

もう思い出したくないのです。
十四歳の少女の
あの苦しかった一日を……。

あの頃

四期 黒川早苗（旧姓 佐藤久子）

最初私は達は、大阪機工の加島の工場に行かされ、ピンポン台のような作業台に万力という工具がついていて、これに鉄の材料をはさみ、ヤスリでこするという仕事であった。ちょうど夏の暑い頃で、広い工場の周囲に植えられた夾竹桃の花が印象的であつた。

米軍が上陸してくると、自分の身は自分で守らねばと、竹槍で薙人形をエイヤッとつく訓練もやらされた。やがて、三国の大坂機工にうつされ、真黒の防空服にモンペ、防空頭巾に合財袋を肩にかけ、道なき道を隊を組んで通った。近くに豊中（今の豊高）の男生徒も動員されており、帰りに三国の駅であうと、おたがいにらみつ放しであつた。ニコリとすると、教護連盟のこわい先生にひっぱられ、退学させられるかもしけんという恐怖が我々から色気を取り去つていた。

工場に入る時、鞄開錠をかぶり拳手の敬礼をし、トイレへ行くたびに柱にかかった縦二十七センチ、横十七センチの鏡をのぞいてかぶり直すのが、私達の出来る唯一のおしゃれであつた。

工場の給食は、大豆に麦のまざつたご飯が直徑十五センチ位のベーグライトのボールに山盛り。副食もヒジキと豆のいたいようなのがこれ又ボールに山盛り。時々、青のりとかの食料品や雑貨の配給があり、工員とやりとりのようなものがあつた。

和這背の高いもの十人位は、君達は優秀だからとが何だとかおだてられて、旋盤工に回された。機械の始動でベルトに手がはさまれ、チヨン切れたとかいう、いわくつきのベルトがブルブル動く中で機械を回し、鉄棒からネジを作つたり、鉄板をけずつてお鍋のようなものを作つたりした。背の小さい人達は、金属の管を機械をけずつたり切斷したりして、又大きな機械を操作して穴を開けている人もあつた。すべてこれらは特殊潜航艇の部品だという事であつた。

だんだん寒くなり、手が凍つて仕事が出来なくなり、工場がストップにくべる薪をくれなくなると、工員の人に教わり隣りの倉庫の空き家の板をめくりに行つた。もつともこれをやるのは腕力すぐれた背の高い人達で、工員さんを先頭に、工具の鉄棒をもつてボイーンボイーンとやり、板を両手にかかえて飛び帰り、油でよごれたぞうきんをストップにポンと投げ、ボーともえ上がる火に、我々はお腹をかかえて笑いな

がらあたたまつた。冬もさり、春風の吹く頃には、隣りの空き家も周囲の柱のみのアラボネとなつた。

新編　日本書紀

冬だったと思う。（注—昭和十九年十二月七日）南海の
地裏が起つた。立つてゐる事は出来ず、地面に尻らをつ

地震が起つた。立っている事は出来ない地面に倒れこむつていてると、工場の煙突が交差しているのが見えた。空襲がだんだん短くなり、防空壕の出入りが烈しくなった。作業は二部制になり、私は昼出て朝家に待機していた。私

自宅は箕面市の百楽荘、牧落駅より一分の所にあつたが、が家の防空壕の真上に大きな桜の古木があり、その上で京方面より飛んで来たB29の編隊が旋回し、高度をぐつと下

て伊丹の飛行場や大阪へ突込んで爆撃した。
その日（注一六月七日と思われる）も防空壕でちぢまつ
いると、ドカンと大きな音がした。阪急電車も不通になり

豊中が爆弾でやられたといううわさをきき、私は学校や友人の家が心配で、友人の吉田慶子さんをさそい、線路づたい歩いて行った。

千里川の辺に大穴があき、豊中駅近くのお寺に死人をタカラで運んで行くのにぶつかつた。遺体にかけられたムシロらはみ出た髪の毛が恐ろしかった。

大阪の勤め先や工場から、線路づたいに疲れきつてトボボとみながかえって来た。

笑つた。「どうしたの」ときくと、爆風で防空壕がつぶれ、生き埋めになつたんだという事。私達はお腹をかかえているので、

また、いつだつたか、三国の私達の工場も空襲され、焼弾を落とされ、機銃掃射をうけた。私は口内炎で、九度程熱を出して、工場を休んでいた。

友人の武勇談によると、この日、焼夷弾があちこちに落門の辺ももえ上がった。けなげな友人など（滝山さんだと憶している）上衣をぬいで焼夷弾をつつみ堀の外へ放りな

た。外に逃げようにも門がもえているので脱出できず、丁の人は助けてくれず、みんなで堀にハシゴをかけ、道路へ飛び降りた所を机銃掃射でバラバラとやられた。ころげるよ

に溝に飛びこんで寝ころび、逃げて走るとまた機銃掃射でラバーラとやられ、逃げに逃げ、やつと落ちついた所は、神川や園田だったということである。

とにかく、そそかしい私が、この日工場を休んでいたのは幸いで、出勤してればオダブツであろうと口の悪いのがついていた。

ひとり迷げまどう

六期

六期原光子（姓・北村）
警戒警報発令と同時に電車通学生にも帰宅の命令が出ました。十三駅まで来ましたら、空襲のサインレンが鳴り響きました。

客は全員下車、どこへゆくあってもなく、大人のあとに続きました。タケチヨーの玄関まで来ましたら、早や敵機の爆音、と殆ど同時にドドン／＼と投下の地びきが起り、敵機來襲の声がしました。避難せよとの指図を受けましたが、防空壕は工場の人で一ぱいでしたので、そこを出ましたが、どこをどういうように逃げましたのでしようか、いつの間にか広い草原にばつんと立っていました。数人の人影がありましたのでしようか。あたり一面火の海と化し、火勢は私のいる方へ押しつけてくるではありませんか。もうこれでおしまいと思つた所までは覚えていましたが、火傷ひとつせずに、気がつきました時は陸橋の下におりました。大勢の人が逃げこんでいました。あちらこちらで爆破する音でしよう、無気味に聞こえています。そのたびに、体が震動しました。誰かに助けられて安全な処へつれて来られたのでしよう。運が良かったのです。でも靴はぬげてありませんでした。「ここなら大丈夫だろ、もう敵機も引揚げたみたいだし……」とてんでに話しながら通りました。赤ちゃんは爆風にでもやられたのでしょうか。でも、心丈夫な気持ちになりました。けれど、じつとしていられず、皆又それぞれに歩きはじめました。その時私の真横を、防空頭巾をかむり、赤ちゃんを背負った若いお母さんが通りました。赤ちゃんは爆風にでもやられたのでしょうか。ぐつたりして息絶えていました。その人に声をかけました。だが、返事はかえってきませんでした。皆ただそそくさと急ぎ足に歩いていました。

電車は開通してませんんでしたので線路伝いに梅田まで出ました。黒い雨がしそぼしそぼ降っていました。夕方おそく疲れ果てて、我が家に帰りましたが、半焼し、庭には不発弾が落ち、入り禁止の札がぶら下つてました。避難先が表示されています。どこからかキーンと金属性の鋭い音がしたかと思うと、ダダダダダと機銃掃射です。皆地面に伏せましたので私もそのとおりにしました。ここでも、動かなくなつた牛や馬や人をみました。まさかと思っていましたので、その驚きは、たとえようもありません。生地獄のような中をぐり抜けてやつとの思いで、母や弟に逢いました時は、口もきけない位の放心状態だったそうです。当時十五才の少女の体験にしては、物凄さが強烈で忘れようとして忘れる事が出来ません。一人で思い出して、身の毛のよだつ思いに浸る時、誰にも味わえないようなむごい経験をしたなあ、あの時、死んでいたら、それまでのことであつて、生き残つた一人であつたればこそ、きょうここに思い出すことも出来るのだと、つくづく生きている実感が湧いてきます。

たましづめ

五期 西野妙子(旧姓 阪本)

逝きし人々に 又傷つきし友の失せし肉片に
学徒動員の日に倒れたるわが友のつぶらなる眼のやさしかり
しよ

目つむりて少女は黙しそのままに戦ひの炎にしづみてゆけり

日記(昭和二十年)

五期 故 矢延昭代

四月三十日 月曜 晴
(書取練習、要塞等……二十七語略)

疎開せし残骸のなかに残りたる

樹々の緑は眼に沁みるなり

た、かひに人の世界は変れども
樹々は変らず また夏や来し

春になつて、日が暖かくなつたと思つたのも束の間、もう
野山には燃えるような躊躇が、絢爛眼を奪うばかり鮮やかに
咲いている。今朝も工場へ出勤する時、摂津富田駅構内に見
事に咲いたつじを見て、私は月日が容赦なくどんどん過ぎ
て行く事を、眼のあたりに見つけられた気がした。思えば、
四月も今日が最後、ああ顧みて私は慚愧に堪えない。私はつ
くづく思う。この長い年月を無為に過ぎた事を……。私は
近頃、月日の経過に對して馬鹿に神経質になつたようだ。一
日一日と、日を過ぎず毎に、あることしも何分の一は過ぎ去
つた。昨日が惜しくてならない。何しろぼんやりとして年を
とるのが嫌でたまらない。どうかしていつまでも、この儘で
いたいものである。だが生者必死の理は千古の真理である。
私も生るものだから、いつかは衰え死ぬのだ。いつその事、
必死必中の神風隊員となつて、若い中に死んでしまいたい。
君國のためにならぬ命をながらえるくらいなら……。

五月十七日 木曜 曜時々雨
再々毎日無し、光陰一尺の壁(沢庵禪師)
永い永い宇宙の時間の経過より考えれば、人の一生なんぞ、
ほんの一瞬間に過ぎないと思う。思えば悠久三千年の我が國
の歴史だつて、今ふりかえつて見れば、またたく間の事のよ
うな気がする。いわんや、人間一人の生涯においておや。そ
して大宇宙より考えれば、実に短い一日ではあるが、人間に

とつてはまたと得難い宝である。ことに最近では、若い軍人
さんなど、人生二十五年とか、二十年とかいう事である。そ
れを思えば、わずか一日でも、何と尊い時間であろう。沢庵

禪師が「光陰一尺の壁」と時間の尊さを指摘されたのは、ま
ことに至言だと思う。思えば私達は、この尊い時間をあまり
にも無駄に消費する事が多いようだ。かの大聖人、禹王は寸陰
を惜しんで勉強したという事であるが、大聖人でさえ、寸陰
を惜しんだのなら、私たち凡人は、分陰をも惜しんで勉強せ
ねばならぬと思う。思えば十八年の今までの間、私は一体、
何をして来たのだろう。考えてみれば、ただ毎日、時間の消
費だったよう思う。そして尊い光陰を可惜、失つてしまつ
ていいのだ。今日から發奮して、今日まで徒らに消費した光
陰をとり戻そう。今からでも遅くない。あらゆる芸能を身に
着けるのは、今の時期をおいて他にないので。ああ「光陰一
尺の壁」とは何という名言であろう。

六月一日 金曜 曜後小雨

予想されていたB29の大坂空襲はついに今日行われた。不

運にも昼間大挙來襲を彼等はあえてしたのである。今度は焼
夷弾ばかりの攻撃であつた。これが、敵の、いわゆる戦略爆

撃というのであるが、私達日本国民の戦意は衰えるどころ
か、ますます昂揚するばかりである。驕敵よ。今にひどい目
にあわせてやる!! 燃え上がる憤怒。

省線不通のため、工場から梅田まで歩いたが、その途中の
おびただしい人の群。誰もが敵懐心に燃えた瞳である。炎々
と燃える焰を見ても、ムラムラと憤りがこみ上がる。こんな

事ぐらいでくじけてはならないのだ。憎いアメリカに対する
復讐はただただ私達が、生産陣に勝ち抜く事である。

梅田へ着いて見ると、まだそこそこ燃えているところがあ
つて、全くむごたらしい有様であった。省線はやはり駄目で
あつたが、しばらく駅で待つて、京都行は、吹田まで

列車を運転するという事なので、長蛇の列を作つて待つた。
まもなく乗れたのは、豚小屋のような貨物列車である。加藤
さんと二人で疲れきつて片隅にうずくまつた。これでも歩い
て帰る事を思えばどれだけ良いかわからない。ようやくのろ
に速度で、列車が吹田に着いたらそこで降りて、又、一時間
ばかり待ち、電車に乗り換え、家へ帰る事ができた。まるで
夢に夢見る心地だった。なんと忙しいきょうの一日だつたこ
とよ。

ぶり返つてみると、頭がぼうとして、何もわからなくなる。
敵の来襲は今後、いよいよ激しくなることであろう。私達は
ばかり待ち、電車に乗り換えて、家へ帰る事ができた。まるで
夢に夢見る心地だった。なんと忙しいきょうの一日だつたこ
とよ。

五月二十九日 火曜 晴

今日は私達にとって何と有難い日であろうか。今朝思いが
けなくも、私達が日頃讃仰してやまぬ特攻隊神鷹の方の、肺
腑をえぐるようなお話を伺つ事ができた。神鷹、酒井少尉殿
を目のあたり仰いで、私は、あまりにも澄み切つた心境に
ただ茫然と頭の下がる思いがした。生死を超越したというの
か、何というのか。ともかく神の如き気高き、清らかさ。こ
の神鷹のお姿を仰いでいる、私の心も清く澄みわたつてく
るような気がした。少尉殿のお話を伺つて、私達は一粒の飴
の尊さをしみじみと感じた。今までにも相当量の飴を無駄に
した事であるが、顧みてつくづく恥ずかしく申訴ない事だと
思つた。工場だからこそ、一粒の飴が落ちていても大して感
じないが、たとえ一粒たりとも、戦場へ行けばどんなに尊い
か知れない。工場で落ちている一粒があれば、最前線の勇士
はどんなにお喜びになる事だろう。ああ前線の事を思うと、
一粒といえどもまことにもつたない。私達はこれからどん
な所に飴が落ちていても、すぐ拾うようにしなければならぬ
と思う。それにしても、生死を超えてひたすら君國に一身
を捧げる日を待ちつつ、恵まれぬ日を過ごしていらつしやる
という神鷹達に一粒でも多くの飴を、私達に羽があれば運ん
でさしあげたいと思う。

幾そ度 敵來るとも 驚かじ
いよいよ職場にはたらかんかな
燃え上る 劫火とともに一億の
胸に燃ゆらん 憤怒の火玉

包装された飴が、まだ箱詰めもされずに積まれてあるのを見
ると、じれつたくて腹が立つてくる。ああ、私達に羽がある
れば、戦場へ飛んで行つて、この飴を運んでさしあげるのに
なあ、と、出来もせぬ事を空想したりするのである。どうか
して早く、前線へ送る事はできないのだろうか。

その運動場もやがて掘り返され、食糧増産の落葉たけと変
たちの逃げつぶりよ実に見事で、殴りをつとらご弘よたる久
魚鳥 いじヨリニヒニモトコトノミツシテ、一五〇〇年三月二日

火中に立ちてとひし君はも

五期 広 実 輝 子

うに火炎を吹きあげています。その炎の色の中へ、水色のテープがゆらりゆらりと、氣味悪い舞踊をしながらおりてゆくのです。北の暗黒は、飛行場を狙つた爆弾でしよう。少女達の多くは、豊中あたりから通勤しています。

午前十一時三十分——となっています、死亡届に。

「全員、麦畑に待避！」
という長沢先生の叱咤するような声が聞こえました。少女達は、工場を囲む竹矢来の目の一つを押しあげると、群がつて、西隣に広がる麦畑に逃れようとした。しかし何しろ竹の目はひとつ、一人一人、よつこらしよつとくぐりぬけるので、

すから手間がかかります。五十米ばかり東にまわれば、門があるのですが、それだけ爆心地に近いというためか、こわくてまわれなかつたのでしよう。私は、フツと笑えて、余裕をとり戻しました。一番あとから、竹の目をくぐり抜けたのを覚えています。

麦畑に分散待避と言われても、何一つ、掩うものがないのが、私を不安にさせました。何より、今、舞い上っている得体のしぬぬ物体が落ちてくるのが、気になります。あれにやられてはまらない。という思いで、私についてくる数人の少女を連れて、麦畑から道一つ隔てた青年学級の建物のかげにかくれました。しばらく落着くまで、ここにいようという

ことにしたのです。ところが長沢先生に、「麦畑に分散待避せよ」といつているのだ。勝手な行動をとつてはいけない。全員分散待避！」

と叱られてしましました。先生の方では、てんてに勝手な行動をとつたら把握できなくなるし、建物のそばは危険と判断されたのでしよう。私は、下級生の手前、少々恥ずかしくて、スゴスゴ麦畑に入つたのを覚えています。

夜來の雨で、麦畑の溝はぬかるみ、水溜りもできています。何度もか襲う爆音の度に、少女達は、泥水の中に身を伏せ、おそろしさに這いまわりました。

「お母ちゃん！」「お母ちゃん！」
と呼びました。涙を流して呼びます。そして少しでも年上の私のまわりに、ぶつかるように、身体を伏せました。
「離れていないと、やられる時はいつべんにやられるのよ。離れて！」

と何度はげましても、同じことをくり返しました。無理ありません。十三や十四歳の少女達なのです。千代紙を折ったことしかない人達が、冷たく固いジユラルミンを切り、折り曲げ、やすりをかけ、そして今、空から降る殺意の中で、壇

所が折れ、肉ははじきわれて、穴のあいた傷口から血は流れ走っていたのです。

——骨折だな。

それは冷えわたるような認識でした。

「広実さん！ そこにいたら焼ける！」

私の左隣にいた小野幸子さんが、細いシリエットとなつて

おおいかぶさつて来たのです。背中から焼かれていくような恐怖、それは熱風でもあつたのか。敵にしがみついた私は、

左手で救急袋を押え、右手の上に顔をふせたようです。胸がはりさけるような恐ろしさです。

機首をグーとさげて斜めにつつこんでくる敵機の、風防ガラス越しに、アメリカ兵の顔が、くつきりと私の頭の中に浮かびました。

—— 悪魔！ 悪魔だ！ 人間が人間を殺す？ そんなことがあつていいはずはない。間違つている！

今まで一度として疑うことのなかつた戦争へ、私は、はりさけんばかりの恐怖の中へ、はじめて叫びました。人間が人間を殺すのはまちがつてゐる！

その瞬間、私の左手は碎かれていたのです。無音の世界か、大音響の世界か。……それまであんなに嫌つていていた泥水の中へ、ベタッと座りこみました。泥水の中へ落ちこんだ時のみじめな敗北感。……私は右手の上に顔を伏せたまま動けませんでした。声もあげません。ふしぎに静まりかえつてしましました。……昨夜みた蛇の夢、お母さんは縁起がいいなんていつたけど、嘘やわ。……前線の兵隊さんが負傷した時、わからぬといふ話、あれもうそやわ。……これ夢じゃないから。いつものようにさめるのとちがうかしら。さめてほしい。

その時間がどれだけあつたものか。おそらく瞬間的なものであつたのでしよう。

「痛い！ 痛いの！ 広実さん、助けて！」

叫び声に私は頭をあげました。私は自分の傷を見ることが出来ず、先に声の主をみました。

七期 山田宏子(旧姓辻本)

大阪が空襲され梅田の方も全滅し、阪急百貨店も全壊した

というニュースというよりデマが入つて来た時、それはショックでした。というのは父が徴用で北の消防署に勤務しているのですが、帰つても来ないし、全然連絡もないのです。母

が自分の着物と引き換えに手を入れて來た白米で、ニギリメシを作り、私が自転車で岡町から梅田まで行く事になりました。空襲のため電車が動かなかつたからです。三国をすぎ三に近づくにつれ、異常なまでの空のようす。それは赤黒く押しつぶされそうにまでかぶさつてくる雲、太陽が爆発し、この世が最後の時はこんな有様かもと思う程に恐ろしげな空模様に、初めて悲愴感がひしひしと身にしみて、ペダルを踏む足も、知らず知らずに速く、力がこもつてくるのでした。

これが空襲やけというのだと後でわかりました。朝やけや夕やけの美しい空に、もう一つ空襲やけがあつたとは……。

淀川の鉄橋まで來た時、警官に止められ、理由を話して通してもらいました。

「氣をつけて行くんだよ。危ないと思つたら、すぐ引返すんだよ。」

地獄図絵

大阪が空襲され梅田の方も全滅し、阪急百貨店も全壊した

というニュースというよりデマが入つて来た時、それはショ

ックでした。というのは父が徴用で北の消防署に勤務してい

たのですが、帰つても来ないし、全然連絡もないのです。母

が自分の着物と引き換えに手を入れて來た白米で、ニギリメ

シを作り、私が自転車で岡町から梅田まで行く事になりました。空襲のため電車が動かなかつたからです。三国をすぎ三に近づくにつれ、異常なまでの空のようす。それは赤黒く

押しつぶされそうにまでかぶさつてくる雲、太陽が爆発し、この世が最後の時はこんな有様かもと思う程に恐ろしげな空模様に、初めて悲愴感がひしひしと身にしみて、ペダルを踏む足も、知らず知らずに速く、力がこもつてくるのでした。

これが空襲やけというのだと後でわかりました。朝やけや夕やけの美しい空に、もう一つ空襲やけがあつたとは……。

淀川の鉄橋まで來た時、警官に止められ、理由を話して通してもらいました。

「氣をつけて行くんだよ。危ないと思つたら、すぐ引返すんだよ。」

みを残すばかり。私の立つ地点の南から東は、円光を放つよ

うと、十三や十四歳の少女達なのです。千代紙を折つた

あとの瞬間、私の右横にとびこんで來た小西弥栄子さんの、胸のあたり、そして太腿のあちこちから血が流れているので出来ず。先に声の主をみました。

「逃げられる？ 逃げられたら逃げなさい。」

私は一生懸命言つたつもりでしたが、低い声だったのです。小西さんはびつくりしたように、眼をみひらくと、黙つてよろよろつと立ち上がり、闇の中に消えてゆきました。

私は、はじめて自分の左手をみました。手の甲を血は幾筋になつて流れていきました。少し動かすと、ガサッと骨のう

ちあうのがわかりました。銃弾が貫通し、撓骨、尺骨の四カ

よ。」

昭和50年10月1日

をおとして行くの音もしません。すぐには隣組からの運ぶ役目をうけ、池の方へ行くよう池片でもうけたの破片でもうけたの苦しそうに歩いて目の前にキラキラ直すのに心地いい

電氣もつかない暗い夜に、おまけに死者の横に腰かけて、感情もなく話しこんでいる人達。無表情にみつめている人達。私もうつろな気持で、何気なく死んだ人達を見ていた時、「アッ!! 藤原さんだ!!」
百雷が一時に落ち、グワーンッと頭をなぐられたような、身體の中を稻妻がかけ抜けたようなショックで、しばらくは声も出せない位でした。
空襲になる一時間程前まで、いつしょに難刀の稽古をして、
「ニニニニ」としながら、ドコドコひつひつと、今こになつて、ハシコ

電氣もつかない暗い
感情もなく話しこんで
私もうつるな気持で、
「アッ!! 藤原さんだ
百雷が一時に落ち、
体の中を稻妻がかけ抜
も出せない位でした。
空襲になる一時間程

花
•
惨
然

井上まさ先生

昭和十六年二月、阪急岡町の駅に下り立つた私は、西も東

もわからぬままに、道行く人に尋ね尋ねして、当時の府立豊中高女にたどり着きました。はじめて見る学校の、明るくしつとりとした美しさと、周囲には住宅もまばらでいかにも郊外といった感じののびやかな環境が、まず私をよろこばせたものです。桜の花びらをぬいた低い坪といい、屋根と羽目板の洗練された配色といい、今まで私のもつていた学校というもののイメージとは、およそかけはなれたムードがそこにありました。桜の木がいっぱいあって、折からチラホラ綻び始めていました。

創立五年目、先生も生徒も洗剤として、一時間一時間の授業がどんなに張りのあるものだったことでしょう。しかし、この年の十二月八日、日本はあの不幸な戦争に突

入してしまったのです。

豊中じゅうの小学生の女子のあこがれの的だつたあの制服
がもんべに変り、運動場では教練が行われるようになりまし
た。しかも担任が自分のクラスを指揮しなければならないの
です。「ギョツケーイ」、「ミギヘ——ナラエツ」、「ナオレツ」

火の粉の間をくぐり抜けながら近づく私を見て、父も大驚きましたが、持場を離れるわけにもゆかず、弁当だけ手渡してすぐ引返す事にしました。

「気をつけて帰りやッ!!」と、くり返しどなるようにいつている父の声を後に、帰路につき、済生会病院の前まで来た時先程のおじいさんはもういませんでした。苦しそうにうめく人の声が、弱々しく聞えるだけで、死んだようにぐつたり動かぬ人の数が増していました。

豊中が空襲された時でした。体育館で薙刀の練習をしていた私や、藤原敏子さん数人は、鳴り渡る警戒警報のサイレンで、帰宅する人、学校を護るために残る者とに別れました。すぐに空襲警報に変る間もなく、爆音をひびかせ、にくらしいB29の魔の機影が見え、慌でもするようにならバラバラ爆弾

いのです!! この世とも思えぬ地獄図を知つてもらうために、あまりにも言葉や文章が弱すぎるのです!! ギセイ者を運び終つて家に帰つても、疲れをとるにも風呂もなく、空襲で電線がズタズタにされているので、電気もござ、むし暑いのに、涼をとるのは破れたウチワだけで、ほんとうにめいつてしまます。又何日も電気がつかないままで過ごすのかと思うと、裸電球の光りが、いやになつかしく思いい出されるのでした。

近くの瑞輪寺には、たくさんの犠牲者が、本堂の前の石碑上に並べられていました。

焼場では、死者が山のように積まれ、油をかけられ火葬されていると、見て来た人が話ををしていました。戦争、そして空襲がこんなに人間の心を無味乾燥にしてしまうものなのかな?

して大宇宙より考えれば、実に短い一日ではあるが、人間に

して早く、前線へ送る事はできないのだろうか。

昭和50年10月1日

(7)

尚和会報

その運動場もやがて掘り返され、食糧増産の諸ばたけと変りました。か細い腕で歎をふるい、しなやかな肩に肥え桶をかついで、生徒たちは黙々と働きました。

教室での授業が次第にすくなくなり、戦争も終りに近い昭和十九年には、ついに豊中高女学徒報団隊が結成されて、二年生から五年生まで、上級生から順に工場へ動員です。学校も工場になつて、身体の弱い人はそこで働きました。私は当時の三年生（六期生）の一部を連れて、庄内の押谷工業といふ会社へ行きました。三国駅からの長い道のりを、雨の日も、風の日も、整然と並んで通つたものでした。鉛筆をもつ手にドライバーを握り、油にまみれながら、一心不乱に航空機の部品をつくつたお河童の少女たち。その姿は今も映の裏に焼きついています。

戦局が日を追うて不利となるにつけ、米軍機の来襲がひんぱんになりました。二十年六月一日の、あのすさまじい大阪大空襲の日のことも忘れられません。都島から通つていた伊藤千代子さんが、家の方がやられているという噂を聞いて泣き出しました。ほかの生徒を工場のかたに頼んで、私は彼女を都島まで送つて行きました。阪急電車も市電ももちろん動いていません。大阪市内はまさに火災の片端でした。あれはどこ通りだったのか、御堂筋ぐらいの広い通りを行つたのですが、両側の建物が一軒のこらず炎々と燃えていて、文字通りの火の海、広い道路のまん中を歩いていても呼吸が苦しむ、自分の身体にまで火がつくのではないかと思われるほど熱気が充満しています。恐ろしさと苦しさで泣くことも忘れた伊東さんの小さな肩をしっかりと抱いて、夢中で、火のないところを求めて走りつづけました。どこをどう歩いて都島までたどり着いたのか、全然覚えていません。空襲のあと雨に逢い、まつ黒になつて帰つてきました。

そして忘れもしない六月七日。豊中高女の生徒のほとんどがそこへ動員されていた。三国・庄内の一带が大空襲に見舞われた日。

シャーチャーという不気味な音とともに焼夷弾が雨のようにならせてきて、たちまちあちらでもこちらでも火の手があります。防空壕も完備していない工場に、このまま生徒たちをおいては危ないと、敵機の切れ目に生徒を逃がしました。當時の庄内はまだ村で、工場はその村はずれの田んぼの中にありましたので、畦づたいに逃げさせるのが一番安全だと思ったのです。

「一生懸命走るのよオー。学校へ集るのよオー。」と叫ぶ私の声が、先頭の子の耳に届いたかどうか、若い彼女

の運動場もやがて掘り返され、食糧増産の諸ばたけと変りました。か細い腕で歎をふるい、しなやかな肩に肥え桶をかついで、生徒たちは黙々と働きました。

教室での授業が次第にすくなくなり、戦争も終りに近い昭和十九年には、ついに豊中高女学徒報団隊が結成されて、二年生から五年生まで、上級生から順に工場へ動員です。学校も工場になつて、身体の弱い人はそこで働きました。私は当時の三年生（六期生）の一部を連れて、庄内の押谷工業といふ会社へ行きました。三国駅からの長い道のりを、雨の日も、風の日も、整然と並んで通つたものでした。鉛筆をもつ手にドライバーを握り、油にまみれながら、一心不乱に航空機の部品をつくつたお河童の少女たち。その姿は今も映の裏に焼きついています。

戦局が日を追うて不利となるにつけ、米軍機の来襲がひんぱんになりました。二十年六月一日の、あのすさまじい大阪大空襲の日のことも忘れられません。都島から通つていた伊藤千代子さんが、家の方がやられているという噂を聞いて泣き出しました。ほかの生徒を工場のかたに頼んで、私は彼女を都島まで送つて行きました。阪急電車も市電ももちろん動いていません。大阪市内はまさに火災の片端でした。あれはどこ通りだったのか、御堂筋ぐらいの広い通りを行つたのですが、両側の建物が一軒のこらず炎々と燃えていて、文字通りの火の海、広い道路のまん中を歩いていても呼吸が苦しむ、自分の身体にまで火がつくのではないかと思われるほど熱気が充満しています。恐ろしさと苦しさで泣くことも忘れた伊東さんの小さな肩をしっかりと抱いて、夢中で、火のないところを求めて走りつづけました。どこをどう歩いて都島までたどり着いたのか、全然覚えていません。空襲のあと雨に逢い、まつ黒になつて帰つてきました。

そして忘れもしない六月七日。豊中高女の生徒のほとんどがそこへ動員されていた。三国・庄内の一带が大空襲に見舞われた日。

シャーチャーという不気味な音とともに焼夷弾が雨のようにならせてきて、たちまちあちらでもこちらでも火の手があります。防空壕も完備していない工場に、このまま生徒たちをおいては危ないと、敵機の切れ目に生徒を逃がしました。當時の庄内はまだ村で、工場はその村はずれの田んぼの中にありましたので、畦づたいに逃げさせるのが一番安全だと思ったのです。

「一生懸命走るのよオー。学校へ集るのよオー。」と叫ぶ私の声が、先頭の子の耳に届いたかどうか、若い彼女

たちの逃げつぶりは実際に見事で、感動をつとめた私はみるみる引き離されました。

あとで思えば、そのときは機銃掃射の恐ろしさなど夢にも知らず、なんと無謀な指示を下したものかと、思い出すたびに背筋の寒くなる思いですが、やつとたどり着いた学校に、生徒たちが一人も欠けず揃っているのを見たときは、身体中の力がいつぶんにぬけて、涙がこぼれました。

しかしそのよろこびも束の間、学校には悲しい知らせが届いていました。三国の石産精工へ動員されていた二年生が三名、きょうの空襲で亡くなつたというのです。

学校に人手が足りないままに、たまたまいあわせた私は、三人のお宅へつらいお知らせを持って行く役目を仰せつかりました。たしか男の先生とご一緒にいたと思うのですが、それがどなただつたのか全く記憶していないほど、私は動転していました。

「なんでもうちの子だけ死なんなんなのです。」

と、泣きながら私たちに食つてかかられた一人のお母さんの声が、今も、耳もとで聞こえるような気がします。あの理不尽にいたましい「母」の叫びを、私は生涯忘れることができないでしよう。

負傷した日のことは覚えていないのに、二度目の手術までの五年間のこととは、今でもくわしく書けるほど、考ることが多い日々でした。

六月七日の負傷に続いて、十五日に家が戦災にありました。結果、終戦の後も、私は、四国疎開先に住みついた母や兄妹と別居し、父と二人だけの下宿生活をしました。私はお尻に破片を持ったままの孤独で暗鬱な暮しの中で、私は個人の恨みは消えていました。けれど忘れてはいません。私の経験を通して、あれがお尻でなく頭だったら、あの日死んでいたらという認識が、さまざまの思考の原点になっています。そして私は亡くなられた方の無念を思い、それを考えているわけです。

「暗い青春」も、三十年の間には風化し、むしろあればど真剣に物を思い考えた日々は美しくさえ懐しまれ、とつぶに私個人の恨みは消えていました。けれど忘れてはいません。私の経験を通して、あれがお尻でなく頭だったら、あの日死んでいたらという認識が、さまざまの思考の原点になっています。そして私は亡くなられた方の無念を思い、それを考えない人の無関心さをいやだと思うわけです。

さまざまな人が、さまざまの方法で、平和運動、ノーモアヒロシマ、戦没学徒の手記などに訴えておられても、その叫び声の虚しさを私は感じる時がありますが、廣実さんはいかがですか。私は平和運動をする人達、あるいは良心的な識者の声、政治にたずさわる人々をどうというのではありません。何をいつても、真剣に耳をかさなくなつてしまつている人々の無関心さに、はかりしれない虚しさを感じてしまうのです。

「一人だけの慰靈祭」という言葉に、私は胸をうたれます。そういった人がいる限り、私は死んでいた人たちの無念さ、哀しさのいくらかは慰められるのではないかと。

「一人だけの慰靈祭」に私も加わりたいと思います。

風化させてはならない体験

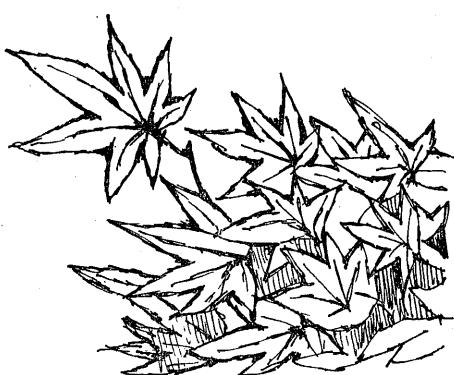
八期 福井敏子

私は六月七日、無我夢中の興奮と放心の中にすごしたのです。異様に暗い風景をおぼろにたぐりよせることが出来るだけ、忘れてはいるのじやなくて、それが本当の所です。誰の声も耳に入らなかつたし、誰がどつち向いて走り、どうしたのやら……。

それ程幼稚な（私は特に）私たちが、戦渦にまきこまれたことの意味あいを、あとあとになつてずいぶん考えたという事以外に、当日のことは何を書くことも出来ないのです。

幸い私は生きています。いまは大変な経験をしたということがだけが、私の小さな歴史の一頁に残つてゐるだけで、自分は幸せだと思つてゐます。

でもお尻の負傷はいやなものでした。直ちに行われた手術は失敗で（モウレツに痛くて泣きわめいたことは覚えていました）、五年ものあと、勤め出してからもうあたりも落着き、衰弱でさえ、もう何人かの人は、頭かくして尻かくさずだつたんだね、とユーモアでもつて、私の負傷について話していました。



尚和のこころ

學校長 山本 弘

会員の皆様御健在でおすごしですか。

去る五月十八日の総会には、近來にない多數の御参加を戴き、各期でそれを趣向をこらしたつどいを催され、仲々の盛会でございました。又六月七日には、同窓有志の呼びかけによる学徒動員戦没の方々の追悼式が岡町の瑞輪寺でしめやかに當られ、これにも予想を上廻る多くの御参列を賜り、世話役の方々の御尽力も酬われたことと思います。更に、戦時中の記録の収集・編集・製本に奔走された有志の御献身振りにも、心から敬意を表したいと思います。是非多數の同窓生諸氏にお読み戴くよう私からもお願いしておきます。

母校の改築も、丁度前半を終り、当節の苦しい地方自治体の財政にも拘らず大した支障もなく進行して居りますことは誠に有難いことだと感謝しておる次第です。然し、全部が完成をみますまでは未だ二、三年を要することと考えられます。

さて、いつも感じることですが、本会の呼称は誰方の命名かは存じませんが、仲々よく出来ていると思います。尚和は昭和にも通じ、日本最古の成文法である聖徳太子の十七条の憲法（いつくしきのり）の第一条にヒントを得られたことでしょうが、和を尚ぶことを第一義にかかげられた同窓会の見識に頭が下ります。然し、この和の意義の深さを、私達はあまり皮相にとらえてはならないと思います。「君子和而不同（論語）」は名言ですが、私は、これよりも、中庸にある「君子和而不流」や、又同書の「發而皆中節、謂之和」の方が好きです。和して流れない、流されない、むつかしいことですが、今日の生活に何とうれしい有難い言葉でしようか。又、発して節に中う（かなう）のが和の本質だという、この言は更にうれしい。節のないズンベラボウの人間のマンエンしている世に、節にかなうのが真の和だと、今更のように痛感致します。

節にかなつて而もなごやかな、むつみあつて而も流されない尚和の真の姿を、この会の発展のために祈ります。

朝露をふみし薔薇の香にむせて力をこめて音たてて剪る

昭和50年度教職員異動

- | | | | |
|-----|-------|------|--------------|
| 就退職 | 井上謙之助 | 〈数学〉 | (非常勤講師) |
| | 柳沢千吉 | 〈数学〉 | (府立柴島高校) |
| | 谷 隆 | 〈社会〉 | (府立柴島高校) |
| | 佐々木利昌 | 〈社会〉 | (府立柴島高校) |
| | 上田譽志美 | 〈社会〉 | (府立堺工業高校) |
| | 岡 崎 進 | 〈事務〉 | (府立茨木養護学校主査) |
| | 赤松 敦子 | 〈事務〉 | (私立福祉施設希望館) |
| 來任 | 杉木勝磨 | 〈数学〉 | (府立泉大津高校) |
| | 久保 彰男 | 〈数学〉 | (府立箕面高校) |
| | 山野邊鏡基 | 〈社会〉 | (府立貝塚高校) |
| | 迫田 茂 | 〈地学〉 | (新任) |
| | 本村津男 | 〈社会〉 | (府立堺工業高校) |
| | 北本 寛 | 〈事務〉 | (定時制) |
| | 平田勝彦 | 〈事務〉 | (新任) |

教科書・参考書・辞典

昌文堂書店

豊中市本町 6-8-2 TEL 852-5283

御見合・御結婚・記念写真は…

ポートレート専門の

佐々木豊写真館

豊中市本町7丁目1-27(豊高通) TEL (852) 4162番
吹田市千里山関西大学前 TEL (388) 4474番

昭和50年10月1日

昭和50年度総会催さる

昭和50年5月18日(日) (定例の五月第三日曜日) 母校恵風苑にて、12時半より総会。13時より野点、福引等をまじえて、大いに語り合いくつろぎの、ひとときをすごしました。

御出席は山本校長を始め、恩師の諸先生、高女期をも含めての総勢約三百人。来年開催されます総会にはどうか、みなさんさそい合せて御参集下さい様御願いします。

快晴に恵まれました五月十八日、何十年ぶりでございました母校を訪れ、同窓会に出席出来まして本当にうれしくございました。見るもの皆なつかしく、時を同じうして尚和会館で高女一期生会を開かせていただきましたことを感謝致して居ります。前の期会で今度は校舎新築の時旧校舎が残されて居りますうちに母校でとの皆の願いが達せられたわけでございます。

校長先生もお忙しい中をお出でいただきお言葉を下さいました。又、茶菓のおもてなし、福引などで私達の宴も一そうちのしく賑わせていただきました。いろいろと本当に有難うございました。

ますます御発展の程お祈り申上げます。

高三期会開催報告

山本
孟

昭和四十九年十一月十日、梅田の北阪急ビル内中華料理店「大湖」で、三年振りに会を催した。当日の御出席の先生方は、野曾原、倉田、高橋、鶴崎、山田、吉田(旧北村)、梅田、関、越水、武井、井上(旧中尾)、大北、櫻並(旧八杉)、中田、肥塚夫人の十五名の方々。集まつた会員は八十名を越え、関東や四国、中国など遠方からの参加者に盛大な拍手が贈られた。会は時間を忘れてなごやかに進行した。十年振り、二十年振りの再会もあり、りっぱな風貌にせつして名前が思い出せない悲喜劇もあった。

しかし、未だ連絡もつかない人も何人があり、心残りであった。

次回はさらに多くの出席者でござることを期待している。

元運動部出身者に告ぐ

近く母校運動部後援会が結成されますので、運動各部OB・OGは、ハガキに住所、氏名、旧所属部、卒業年度を明記の上、左記へお送り下さい。

〒530 大阪市北区西寺町一―四六
谷田 一彦

昭和49年度決算

(自 昭和49年5月1日)
(至 昭和50年4月30日)

収入総額 1,049,974円
支出総額 800,159円

		予 算 額	決 算 額
收 入	入 会 金	814,500	814,500
	雜 収 入	80,000	103,000
	前 期 繼 越 金	132,474	132,474
	合 計	1,026,974	1,049,974
支 出	事 務 費	80,000	65,030
	慶弔費	10,000	5,000
	会館維持費	10,000	0
	卒業生記念品代	70,000	69,000
	東京支部援助費	20,000	20,000
	会報發行費	500,000	358,644
	總 会 費	150,000	131,615
	積立金	100,000	100,000
	名簿整理事業費	50,000	38,050
	予 備 費	36,974	12,820
	後 期 繼 越 金		249,815
	合 計	1,026,974	1,049,974

昭和50年度予算

(自 昭和50年5月1日
至 昭和51年4月30日)

收 入	入会金	768,000
	雜収入	80,000
	前期繰越金	249,815
	合計	1,097,815
支 出	事務費	100,000
	慶弔費	10,000
	会館維持費	10,000
	卒業生記念品代	70,000
	東京支部援助費	20,000
	会報発行費	500,000
	総会費	150,000
	積立金	100,000
	名簿整理事業費	100,000
	予備費	37,815
	合計	1,097,815

特別会計

	前期繰越金	収入	支出	次期繰越金
尚和会積立金	600,000	100,000	0	700,000
名簿発行積立金	339,229	3,600	0	342,829
会館維持積立金	163,550	0	0	163,550
合 計	1,102,779	103,600	0	1,206,379



藝術教室

水彩・木彫・くみひも・児童画・数学・ヨガ
きもの着付・生花・洋画・書道・水墨画・染色
デザイン・はり絵・写真・フラワーデザイン
文学・バレエ・日本画・カラー写真・クロッキー

大特集
杉本写真場

豊中市末広町 1-1-28 (豊中駅西側) 〒 560
TEL 841-7771(代)